群教セ	F09 － 01
	令5.284集
	教育相談

自他の考えを認め合い、自己のよさに気付くことのできる児童の育成

―ＩＣＴの活用で幅広く考えを知り、自己有用感を高める活動を通して―

特別研修員　髙橋　巧

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

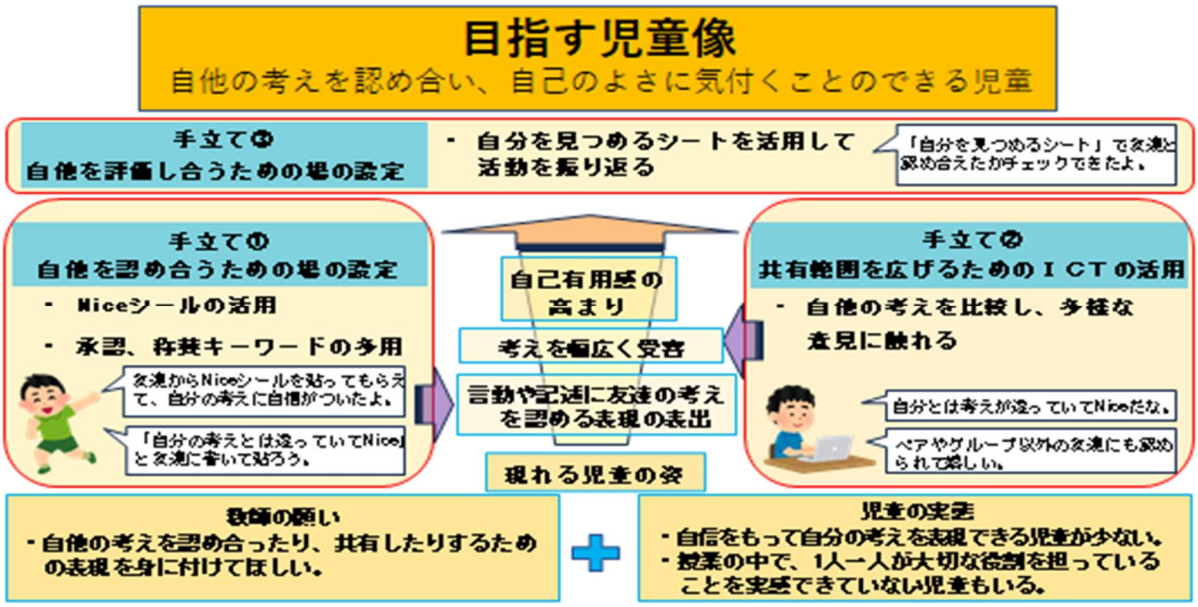
文部科学省の「令和４年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」では、不登校児童生徒数が前年比で小学校が29.0%、中学校が18.7%それぞれ増加している。不登校あるいは、長期欠席が続いている児童生徒に対しての対策が急務となっている。日々行われている授業の中で、自分の必要性を感じられたり、他人から自分の考えを認められたりする活動を充実させていくことで、不登校や長期欠席となる児童の未然防止の一助となると考える。

研究協力校の児童は、素直で真面目な児童が多い。学年行事や学校行事にもみんな揃って仲良く参加することができている。和気あいあいと活動できるよさをもっている児童が多い。しかし、児童が日々抱いている自己有用感に関するアンケートの結果から、「自分はクラスや友達の役に立っている」という「クラスの自己有用感」の項目で平均よりも低い児童が20%弱いることが分かった。しかし、児童の日常の様子を見ると、回答した児童の中には、自己のよさに気付いていない児童も多くいるのではないかと推察した。こうした児童に対して、自他の考えを認め合う活動によって、自己のよさを再認識し、「自分は他者の役に立っている」と感じる児童が増えていくと考えた。また、認め合う活動の中で、ＩＣＴを活用し、短時間で他者の多用な意見に触れることで、より多くの児童と自己の考えを伝え合い認め合うことで、自己有用感を高めることができるのではないかと考えた。

そこで、教科指導の中で、ＩＣＴを活用し、自己有用感を高める活動を繰り返し行っていくことで、自他の考えを認め合い、自己のよさに気付くことのできる児童の育成を目指すものとして、本研究テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

以下のような手立てで実践を行った。

手立て１　自他を認め合うための場の設定

〇Niceシールの活用

・考えを共有する場面を設け、Niceシールを貼り合うことで承認、称賛の気持ちを形として示す。

〇承認、称賛のキーワードの多用

・教室壁面に掲示した承認・称賛の手本となる一覧表（図１）を基に、ペア・グループでの話合い活動の中で表出した考えのよさに対して、承認、称賛の言葉掛けを児童が互いに行う。

自分では思いつかなかったことを考えていてNice
自分の意見とちがっていてNice
なんかすごくてNice
一生懸命に考えていてNice

図１　承認・称賛の一覧表

手立て２　共有範囲を広げるためのＩＣＴの活用

〇自他の考えを比較し、多様な意見に触れる

・ＩＣＴを活用することで、個別の考えをクラス全体で共有することができるようにするとともに、自分の考えとの類似点や相違点を見付け、他者の考えのよさに触れるなど、より多様な考えに触れられるようにする。

【自分を見つめるシート】

4年　組　番　名前

自分なりに　よくできた⇒A　できた⇒B　つぎはがんばりたい⇒C				
～見つめるポイント～	日づけ			
	/	/	/	/
自分の考えが書けたよ　（自）				
友だちに考えを伝えられたよ（自）				
友だちの考えが分かったよ　（他）				
友だちからのミトメイン　（他）				

図２　「自分を見つめるシート」

手立て３　自他を評価し合うための場の設定

〇「自分を見つめるシート」を活用して活動を振り返る

・自他の活動を評価し合うために、「自分を見つめるシート」（図２）を用いて本時の取組を自己評価し、ペアの児童から他者評価を受けられるようにする。

本研究は、理科で授業実践を行った。一単位時間の中で、予想を立てる場面と振り返りを行う場面でそれぞれの手立てを取り入れた。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

〇　互いの考えに対してNiceシールを貼り合い、自他の考えを認め合うことで、自分の考えに自信をもって交流することができるようになった。低かった児童の自己有用感を高めるための一助となった。

〇　「自分を見つめるシート」の活用により、児童が自身の活動をより客観的に見ることができるようになった。また、自分の考えをグループの児童や多くの児童から認められる場をそれぞれ設定したことで、自己のよさに気付くきっかけとなったと言える。

〇　ＩＣＴの活用により、即時的に多様な意見に触れることで、自分の考えと他者の考えの相違等をより客観的に見ることができるようになった。また、より多くの児童と認め合いや承認、称賛の機会をもつことができ、自己有用感を高めることができた。

２　課題

〇　Niceシールを貼った理由をより詳細に伝え合う時間を確保し、互いの考えのよさや細かな違いについても認め合うことができるようにすることで、教科のねらいの達成と自己有用感のより一層の向上を目標として、継続的に指導や支援を行っていく必要がある。

実践例

１　単元名　　「とじこめた空気と水」（第４学年・２学期）

２　本単元について

本単元は、空気及び水の性質について興味・関心をもって追究する活動を通して、空気及び水の体積の変化や圧し返す力とそれらの性質とを関係付ける能力を育てるとともに、それらについての理解を図り、空気及び水の性質についての見方や考え方をもつことができるようにすることがねらいである。始めに、「閉じ込めた空気を圧すと、体積は小さくなるが、圧し返す力は大きくなること」を空気鉄砲を用いた活動を通して捉える。次に、「閉じ込めた空気は圧し縮められるが、水は圧し縮められないこと」を空気鉄砲と水鉄砲の比較を通して捉える。最後に「閉じ込めた空気や水の性質を利用しているものを生活の中から探し出したり、遊びに適用したりして学習したこと」が生活に生かされていることを実感することで学びを深めていく。

本単元の目標を達成するためには、児童が問題に対して主体的に対話的な話合いを通して解決していく能力の育成が必要となる。しかし、協力校では、思考力や表現力に課題をもっている児童が多いことから、考えを広げたり、深めたりする活動を通してその力を高めていく必要がある。

そこで、本単元では、互いの考えを認め合う活動を取り入れ、自己有用感を高める活動を通して、自己のよさに気付けるようにしていく。自分の考えに自信をもつことで、より主体的に問題に向き合い教科の目標達成につながっていくと考え、教科指導に生徒指導の考えを取り入れた授業実践を行う。この授業実践によって、思考力や表現力の向上にもつながっていくと考えられる。

以上のような考えから、本題材（単元）では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1)　空気と水の性質を調べる活動を通して、それらについて理解を図り、実験に関する技能を身に付けるようにする。（知識及び技能） (2)　主に既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想する力を育成する。（思考力、判断力、表現力等） (3)　主体的に問題解決しようとする態度を育成する。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1)　空気と水の体積や圧し返す力の変化と圧す力の関係について、理解している。（知識及び技能） (2)　空気と水の体積や圧し返す力の変化と圧す力との関係について、既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想し、表現するなどして問題解決している。（思考力、判断力、表現力等） (3)　事物・現象に進んで関わり、他者と関わりながら問題解決しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・筒につめた玉の飛び方について気付いたことを話し合う。
追究する	第２時	・閉じ込めた空気を圧すと、空気はどうなるか考える。
	第３時	・閉じ込めた空気を圧して、体積や手応えを調べる。
	第４時	・閉じ込めた水を圧すと、水はどうなるか考える。
	第５時	・閉じ込めた水を圧して、体積や手応えを調べる。
まとめる	第６時	・閉じ込めた空気と水について学んだことを学習や生活に生かす。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全６時間計画の第２時に当たる。本時では、閉じ込めた空気と水を圧したときの筒の中の様子を予想し、手応えや体積の関係を調べる実験を通して学習問題を解決できるようにする。

学習問題を解決するために、一人一人の考えが尊重され、自己有用感を高める活動を通して、自己のよさに気付く児童が育成できるように以下のような手立てを具現化した。

手立て１　自他を認め合うための場の設定

予想や理由を考えた後に、Niceシールの活用や自他を承認・称賛するキーワードを用いて、互いの考えを認め合えるようにする。まず、問題に対する自分の予想をワークシートに記入する。その後、ワークシートの記録を基に、自他の考えの共通点や相違点などを見付けながら交流を図る。その観点に合った友達や、頑張って自分なりの考えを書いている友達に対してNiceシールを貼る。

手立て２　共有範囲を広げるためのＩＣＴの活用

手立て１においてワークシートに記入した予想をカメラ機能で記録し、共有機能によりクラス全体で閲覧できるようにする。友達の多様な考えに即時的に触れ、互いの考えのよさを認め合い、自己有用感を高めるための活動としていく。

手立て３　自他を評価し合うための場の設定

自他の取組を互いに見つめ直すもので、本時の内容の振り返り後に行う。全部で四つの項目となり、「自分の考えが書けたかどうか」「友達に考えを伝えられたかどうか」「友達の考えが分かったかどうか」「友達からのミトメイン（友達からの承認の印）」とした。

４　授業の実際

(1)　第１時（前時）

単元「とじこめた空気や水」の第１時に、問題を見いだすための活動（図３）として、筒に玉を詰め、押し棒を使って玉を飛ばす活動を行った。プラスチックの筒に詰めた玉の飛び方について、気付いたことや疑問に思ったことを話し合い、個人で考えをまとめた。振り返りでは、「玉は、おしぼうから遠ければ遠いほど飛ぶ。」(図４-①)や「空気を入れれば入れるほどいっぱい飛ぶ。」(図４-②)などの記述が見られた。

図３　問題を見いだすための活動

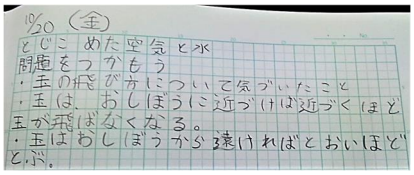


図４-①　児童の振り返り

図４－②　児童の振り返り

(2)　第２時（本時）

導入時に、前時の活動を記録した動画で振り返りを行った。的当てをしている様子や、みんなで一斉に玉を飛ばす様子を視聴した後、前時の児童の振り返り(図４－①、②)を示した後、「とじこめた空気は、おされると、どうなるのだろうか。」という本時の学習問題を示した。

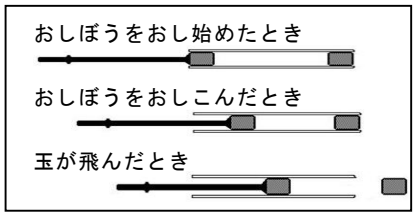


図５　ワークシート

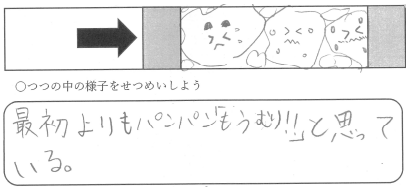


図６　児童の予想

始めに、筒に空気が閉じ込められていることが理解できるように、「身近にある物で、空気を使った道具を知っている人はいますか。」と全体に問い掛けた。すると、風船、タイヤ、水鉄砲、浮き輪など様々な意見が挙げられた。その中の風船を提示して、閉じ込められた空気は、圧せたり、元に戻ったりすることを確認した。風船を圧している時の中の空気の様子は、どのようになっているかを考えさせながら学習問題に戻り、その予想をワークシート(図５)に記入するよう指示した。「おしぼうをおし始めたとき」、「おしぼうをおしこんだとき」、「玉が飛んだとき」のそれぞれの筒の中の空気の様子を図や言葉で児童が表した。児童の予想（図６）には、空気を粒の集まりで表したり、顔の表情で表したり、雲のように表したりと多様な考えが表出した。表出した考えをＩＣＴで記録・提出するよう指示した。その後、予想を基にグループで話合いを行った。児童は、壁面の承認・称賛の手本となる一覧表をときどき確かめながら、自分の考えと他者の考えとの共通点や相違点を考え、よさを見付けてNiceシール(図７)を互いに貼り合った。

「図が分かりやすくかけていてNice」や「説明が詳しくてNice」など、他者の表現や考え方のよさを捉え、多様な考えを認め合うことができた。さらに、ペアやグループの児童だけでなく、ＩＣＴを活用しクラス全体を対象に意見交流を行った。ＩＣＴを介して他のグループの友達の考えのよさに対して、Niceシールを貼り合った（図８）。振り返りでは、本時の学習問題について振り返るとともに、自分を見つめるシート（図７）を活用して、自他の活動について評価し合った。

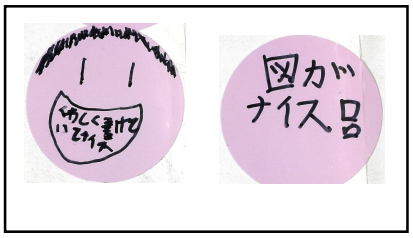


図７　Niceシール

図８　クラス全体で認め合う活動

【自分を見つめるシート】

4年　組　番　名前

自分なりに　よくできた⇒A　できた⇒B　つぎはがんばりたい⇒C

～見つめるポイント～	日づけ			
	10/23	/	/	/
自分の考えが書けたよ　（自）	A			
友だちに考えを伝えられたよ（自）	B			
友だちの考えが分かったよ　（他）	B			
友だちからのミトメイン　（他）	髙橋			

図９　自分を見つめるシート

(3)　第３時

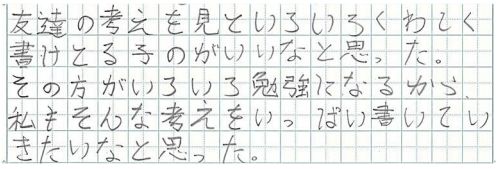
前時の活動を振り返り、学習問題「とじこめた空気は、おされると、どうなるのだろうか。」を追究するために、前時に計画した方法で実験を行った。圧したときに空気がどれだけ縮むのか、手を離すと元に戻るのか確認した。振り返りでは、結果から分かったことを個人でまとめて、予想を振り返り実験結果と比較した。教具を使って、楽しみながら実験に取り組む様子が見られた。

５　考察

一つ目の手立てとして、Niceシールを活用した。これにより、互いの考えのよさを形に表すことができた。今までの話合いでは、特定の児童の発言が多く、自信のなさから発言をしない児童も多くいた。しかし、Niceシールを貼り合う活動で、互いの考えを真剣に聞き、その考えのよさを見付けようとする姿が多くの場面で見られた。この活動を教科指導の中で繰り返し取り組んでいくことで、互いの考えのよさを認め合うことの大切さが浸透し、多様な考えを受容する心が育ってきたと考えられる。実践当初、自己有用感の低かった児童も自分の考えに自信をもって発表する機会が増え、自己有用感の高まりにつながった。

二つ目の手立てとして、考えを共有するためにＩＣＴを活用した。これにより、クラス全体の児童の考えに即時的に触れることができた。共有機能の活用によって、ペアやグループ活動では触れることのできなかった児童の考えにも触れることができた。今回の研究においては、共有機能で多様な考えに触れた後、特によい考えをしていると思った児童に対して、Niceシールを貼る活動を行った。この活動により、クラスでの意見交流が活発となり、「クラスの中での自分の考えのよさ」に気付き、「自分のことを分かってもらえている」という自己存在感や「クラスの役に立っている」というという自己有用感を高める一助となったと考える。また、他者から認められることで、自己のよさに気付き、自信をもって自分の考えを様々な場面で伝えることができるようになったと考える。毎日の授業で継続的にこの活動を取り入れていくことで、より効果が発揮されていくと考える。

三つ目の手立てとして、自他を評価し合うための場の設定として「自分を見つめるシート」（図10）を活用した。活動を振り返り、評価し合うことで、自他の考えのよさに気付き、他者の承認を受けることにつながり、自己のよさを実感するとともに、考えに自信をもつことができるようになったと考える。



友達の考えを見ていろいろくわしく
書けてる子のがいいなと思った。
その方がいろいろ勉強になるから、
私もそんな考えをいっぱい書いてい
きたいなと思った。

図10　活動の振り返り

このように本研究の手立てを行うことで、自他の考えを認め合い、自己のよさに気付くことのできる児童の育成につながると考える。年間を通して継続的に行うことやNiceシールに限らず、ＩＣＴの児童間通信を活用して、即時的に認め合う活動も視野に入れるなど改善を図ることで、自他の考えのよさを認め合い、より一層自己のよさに気付くことができるようになると考える。